

随想

アメリカ労働者の今

常識で判断できない道筋に対応できる心構えを

(株)PPQC研究所 加藤 宏光

トランプ氏が大統領になって、アメリカの実情はどうなっているのか？

今後のわが国への影響への指針として気になる。

一月二十二日のNHKドキュメンタリー報道番組『ザ・リアルボイス』でトランプ氏就任寸前のイリノイ州、GM工場の町で働く人々を支えるダイナーの景色を通してアメリカ労働者の境遇と追いつめられた心境をドキュメンタリーで伝えていた。

一、五〇〇人を雇用するGM工場が、メキシコ移転を計画していた。選挙活動中のトランプ氏がこの工場に立ち寄り、この移転計画を撤回させた、と報道している。スポットで見ると労働者に対して大きな説得力があ

る。しかし、GMがメキシコに工場を移すには、高度な経営的条件下に慎重な検証を加えた上での決済があったはずであり、それを遊説ツアーのために立ち寄ったトランプ氏がその場でひっくり返したとすれば、ポピュリズムの極みとも言えよう（もつとも、テレビ報道がそのまま真実であるとは限らない。事前に組まれた出来レースであるかもしれないが……）。

GMは、四月までに八〇〇人の解雇を予定していて、解雇される予定の労働者たちが食事に集まるダイナー（日本流に言えば食堂か？）の中で、それぞれの意見をインタビュし、また生活の姿を追っているのである。ある人は、一月十三日に解雇

されるが、次の仕事は見つかっていない、という。また、ある人は、メキシコや中国に仕事を奪われている。それを取り返せ、と語る。また、ある若者は、自動車が好きでGMに勤めてきたが、四月に解雇を言い渡された。仕事を探さなければならぬ。自動車業界には浮き沈みがあった。仕事はなんでもあっても働くが、いずれまたGMで働きたい。「稼いでお金を貯めて、二〇一七年製のカマロを買おうんだ！」と言っている。

著者が今から三〇年以上前にアメリカを訪れた時は、アメリカの生産業界は荒れに荒れていた。その時に、著者たちは大学や孵化場等を訪問するに当たり、レンタカーを借りた。もち

ろりんカーンやクーガー等、いわゆる代表的なアメ車を借りた（もつとも行く先々で、なぜ日本車を借りないのか。日本車の方が良いのに……と言われたものである）。

当時のアメ車の評判は悪かった。いわく、修理に際してドアカバーを外したらコーラ瓶が出てきた。いわく、シートの中からドライバールが出てきた。等々。確かに、その時に、借りた高級スポーツカー、クーガー（ほぼ新車）のフロントシートのバックカバーは縫製が悪く、簡単にはがれてしまった。

「さすがアメ車だなく!!」と笑い合ったものである。新車のドア内にコーラ瓶が入っていた、ということは、コー

ラを飲みながら作業していた、ということであり、シートの中にドライバールが隠れていたという事は、それだけいい加減な姿勢で働いている、ということの意味する。当時のわが国では、とても考えられないことであった。

先の番組に登場していた一人、すでに解雇された若者が件のダイナーに毎日通っていた。お金がなくて食事をできない。それでも、なじみの人たちに会えるだけで楽しいのだそうである。

その彼がある朝、食堂の前の雪かきをしている。「何もしないでは何も変わらな。何も開かない。だから、ここで雪かきを始めた。ひよつとしたら食事をさせてくれるかもしれないし！」

とインタビュアーに言う（食事にはありつけなかったが、コーヒーはごちそうになれた。温かいコーヒーに心が和む、とナレーターがつづる）。

その姿には、コーラを飲みな

がら仕事をするようないい加減な姿勢はない。とにかく明日生きる道を探し、それこそ必死な気持ちで伝わってくる。

残念ながら、これまでも、そして今も養鶏生産現場に勤めたる人は少ない（若者に限らず）。先月も、ある中規模生産者が、

「ハローワークにも募集をかけたし、新聞にチラシも入れた。でも一件の問い合わせもない。年末とはいえ……」

と悩みを打ち明けてくれた。

この随想シリーズでも触れたが、三〇年ほど前に業界が一気に呵成に装置産業化したきつかけは、働くヒトの気質の変化が大きな要因であった。衣食住を満たされた現代、汚れ仕事より多少実入りが悪くても格好が良く、奇麗な仕事がしたい、という、働く側の都合に業態が合わ

せた、ともいえる。生産現場における労働気質の変貌を一足先に経験したアメリカでは、三〇年ほど前から現場の汚れ仕事はヒスパニックや黒

人に置き換えられていた。著者の親しいミネソタ州にある大型採卵養鶏会社では、最初に訪れた四〇年余り前には全員が白人であった。しかし、三〇年前には数人の黒人がGPで働いていた。そしてサルモネラ汚染問題で調査に出掛けた二〇年前にはGPの現場ワーカーは全員がヒスパニックに代わっていた。

現在のわが国での生産現場で、アジア系のワーカー（研修生を含む）が相当度に増えている。外国人労働者を一般作業に拡大して受け入れる方向の行政姿勢を考えると、あと一〇年も経過すれば、二〇年前のアメリカに追い付くかもしれない。

そうした折に、今アメリカの自動車工場ワーカーが直面している悲哀を、日本人が託すこともあり得よう。

トランプアメリカ大統領やドゥテルテフィリピン大統領の示す政治の方向性は、今まで慣れ切った手法と大きく異なり、確かに違和感を否めない。

ブリュギアの王ゴールドディアス

がゼウスの神に荷車を奉納した。荷車の梶棒をくり付けたひもが複雑に絡み合って、解けなくなつた。神官は

「この結び目を解くものは全アジアの支配者になるだろう」と予言した。多くの挑戦者が表れたものの、誰も果たすことができなかった。しかし西方からやってきたアレクサンドロス大王は、即座に腰の帯剣を抜き放ち、結び目を一刀両断に切り落としてしまった。

という故事（註）がある。（吉崎竜彦著、『アメリカの論理』より引用）

両大統領が現代の混乱を別の切り口で解決しようとしているとしたら、常識で判断できない道筋が表れよう。どのような展開になるかと、対応できる心構えが必要な時代である。

註：ゴールドディオンの結び目…古代アナトリアの都ゴルディオンの神話とアレクサンドロス大王の伝説